

りんご土着カブリダニ保護体系における
摘果剤・有機リン剤の影響と主要害虫防除効果

【1 成果の概要】

- (1) 選択性の高い殺虫剤を中心に使用し、例年土着カブリダニの発生が確認できるほ場では、摘果剤（ミクロデナポン水和剤85）及び7月に有機リン剤（ダイアジノン水和剤34）を1回使用しても、その後のカブリダニ類の発生に影響が出にくいことを確認しました（図1）。
- (2) 土着カブリダニを保護する防除体系においても、ハダニ類、シンクイムシ類の果実被害は抑えられます（表1、2）。



図1 摘果剤、有機リン剤散布前後のりんご樹上のカブリダニ発生状況（H30～R3の平均）
※ 図中の↓は、有機リン剤散布時期を示す

図1 試験概要（試験場所：農研センター内ほ場）

- (1) 摘果剤、有機リン剤散布区は摘果剤を5月下旬または6月上旬に散布し、有機リン剤は、展葉期にスミチオン水和剤40、7月上旬にダイアジノン水和剤34を使用した。他の時期は、ジアミド剤、ネオニコチノイド剤、IGR剤を使用した。
- (2) 選択性殺虫剤区は、摘果剤を使用せず、BT剤、ジアミド剤、コルト顆粒水和剤、IGR剤、ネオニコチノイド剤を使用した。
- (3) ダイアジノン水和剤34は有機リン剤の中で比較的、カブリダニ類に影響の少ない剤として試験に用いた。

表1 カブリダニ保護体系におけるシンクイムシ類の発生状況

調査年	調査果数	被害果数	被害果率
R1	293	0	0
R2	359	1	0.28%
R3	1,302	7	0.54%

表2 カブリダニ保護体系における果実へのハダニ類の寄生状況

調査年	調査果数	ナミハダニ寄生果率	リンゴハダニ卵1果当たり寄生卵数
R1	43	0.0%	0.09
R2	75	0.0%	0.00
R3	107	0.0%	0.23

表1、2 試験概要（試験場所：図1試験と同じ）

- (1) 使用した殺虫剤は図1、摘果剤、有機リン剤使用区と同様。
- (2) 試験樹から、約150m離れた地点に殺虫剤無散布の区画があり、シンクイムシ類の発生密度が高い。
- (3) 殺ダニ剤は、令和元年7月26日にダニゲッターフロアブル、令和2年は7月9日にスターマイトフロアブルを散布し、令和3年は散布しなかった。

【2 留意事項】

- (1) カブリダニ類を保護するための薬剤の使用方法については、「新果樹のハダニ防除マニュアル 第3版」（農研機構）を参考にしてください。
- (2) 落花期から落花20日後にかけて連続してカブリダニ類に影響のある殺菌剤（マンゼブ剤、アントラコール顆粒水和剤）を使用するとカブリダニ類の発生に影響が出ることがあるため、使用しないようにしてください。
- (3) ハダニ類の増加が見られる場合には、カブリダニ類に影響の小さい基幹防除殺ダニ剤、気門封鎖型殺ダニ剤を使用してください。ただし、ダニゲッターフロアブルはカブリダニ類に若干影響が出ることがあるため、散布後にカブリダニ類減少の有無を確認してください。